オックスフォードの古典学と古典教育
── 歴史と現状[1] ──

小川正広

1．はじめに── ある出来事について

1988年 6月 28日，私は1年間パピルス学を教わった Peter Parsons 氏の好意で，Christ Church College の Senior Common Room（教員談話室）での昼食に呼ばれた．部屋に入ると，そこにはすでに何人かの顔見知りがいたが，私は Parsons 氏の招きでギリシア文学の Lloyd-Jones 教授の隣りに座った．いつもの早口で独特の調子の教授の話を聞きながら食事を終えたのち，私たちは別室に移ってお茶を飲んだ．そこでは，教授の夫人が私たち3人の会話に加わった．Lloyd-Jones 氏は，今年（1989年）の夏でオックスフォード大学のギリシア語の Regius Professor の職を任期満了で辞められる．話題は主に，それを記念して出版される論文集のことだった．別れるとき，夫妻は明日から夏の休暇のためアメリカに出発すると言われた．

それから約1ヶ月後の 7月 25日から5日間，オックスフォードとケンブリッジ出身の古典学者が 3年おきに集まる全国規模の合同古典学会[2]が，オックスフォードの Lady Margaret Hall を中心に開催された．参加者は，私のような外国人も含めて 300人をはるかに上回ったが，しかしその中には，すでにアメリカに発った Lloyd-Jones 氏の姿はなかった．そしてまた，私が1年間 Balliol College でお世話になった Jasper Griffin 氏の名前も，参加者リストの中にはなかった．

話は前後するが，その年の 5月 21日のイギリスの新聞「デイリー・テレグラフ」に，《Classical Shock for Professors at Oxford》という記事が掲載された．それは，89年の秋から空席になる ギリシア語の Regius Pro-

fessor のポストが，以後少なくとも２年間は補充されないという決定が下されたことを伝えるものだった．ギリシア語の Regius Professor は，1546年に国王の Henry ８世 によって創設されたが，その任免権は現在イギリスの首相がもっている．新聞では，この異例の事態に対して，Lloyd-Jones 氏が現職の立場から，「全く寝耳に水で，公然たる侮辱だ」と抗議し，さらに「後任候補者の１人（possible contender）」としてインタヴューを受けた J.Griffin 氏は，「まるでロールス・ロイス社の倒産みたいで，情けない」と憤慨をもらしていた．

以上の出来事は，私の１年間のオックスフォード大学での経験のうちで，最も印象に残ったことの１つである．オックスフォードの古典学部（Faculty of Literae Humaniores）は，87-88年度には ギリシア語 の H.Lloyd-Jones，ラテン文学の R.G.M.Nisbet，古典文学の D.A.F.M.Russell，比較文献学の A.E.Davies，古代史の D.M.Lewisと F.G.B.Millarと W.G.G.Forrest，考古学の R.M.Harrisonと J.Boardman，哲学史の J.L.Ackrill，哲学のD.F.Pears，論理学の M.A.E.Dummett，数学的論理学の A.J.Macintyre の 13人の教授陣を擁し，形而上学と論理学の２講座のみが空席だったが，今秋からの 89-90年度では，Lloyd-Jones，Russell，Ackrill，Pears の４人が退職したのち，その後任未定のまま 合計９講座で開講の予定である（‘Undergraduate Prospectus 1989-90’ による）．

イギリスでは，古典語教育縮小化の傾向は，べつに耳新しいわけではない（≪Classical Shock≫とは だから大変皮肉な表題だ）．だが，それにしても，イギリスで最大，おそらく世界でも第１位の規模を誇るオックスフォードの古典学部で，ギリシア語の講座が空くという事態は，相当深刻な印象を与える．じっさい，前述の 5月 21日の新聞では，イギリスの大学の古典語の教師の数が，72-73年度の 455人から 87-88年度には 384人に減少したという事実を挙げ，今回のオックスフォードの「事件」は，この全国的傾向の象徴だと指摘していた．

Lloyd-Jones 氏は，1961年に現在の地位に就いて以来，この古典学に敵対

的な流れを強く意識して，ヒューマニストの立場から古典学を擁護するとともに，現代の古典教育者の責任を説いてきた．氏は若い頃から現代史に興味をもち，第２次世界大戦中は海軍で日本語や日本史も学んだという．ギリシア学者になってからは，現代と古典とのかかわりにとくに関心を抱き，その方面の考察は最近，‘Blood for the Ghosts’（1982年）と‘Classical Survivals’（1982年）の２冊の論文集にまとめられた．その中で氏は，技術的な職業教育を重視し，しっかりした語学的素養と幅広い教養を軽視する現代社会の風潮は，文明の進歩ではなくむしろ退化を意味すると警告し，さらに古典学者には，伝統的な学問と教育に対する一般の偏見を取り除くよう努力すべきだと説いている(3)．この強い姿勢は，おそらく現在のイギリス政府の文教政策(4)と真っ向から対立するもので，そのことが今回の不幸な出来事の原因の１つだったとも考えられる．しかし，もっと広い視野で見ると，問題はイギリスに限ったことではない．現在，世界のどの文明国でも，技術教育が偏重され，人文教育，なかでも古典語教育は，生き残るために深い反省を求められている．Lloyd-Jones 氏は，今回の退職にあたって，そのことを身をもって示したといえる．

このように，イギリスにおける古典語教育の相対的地位の低下は，否めない事実である．ところが一方，古典学研究一般について見ると，イギリスは今日，歴史上最も多産な時期を迎えているのではないかと思われる．この豊饒さは，古典語の教師の減少とは対照的な現象だ．また教育関係の統計(5)を見てみると，イギリスでは古典語教師の減少と並行して，たしかに古典語（ギリシア語かラテン語のいずれか，または両方）を専攻する学生の数は減ってはいるものの，近代諸言語と古典語のジョイント・コースや，古代史，考古学，古代文明論専攻の学生を含めると，古典や古代文化に関心をもつ学生の総数は，徐々にではあるがむしろ増加しつつあると報告されている．つまり，学生の関心のもち方や古典教育のあり方が少しずつ変化してきており，それにともなって多方面の研究が求められ，結果的に古典学全体が活性化し，複合化してきているのだ．翻訳で古典を読んでそれで古典の価値がわかるの

かという議論もあるが，しかしこの現実の変化を無視して未来は語れない．この新たな傾向を批判的に受け取めながら，今後の道を模索しているのが，イギリスの古典語教育界の現状のようだ．

さて，こうした今日の一般的な課題を念頭におきながら，オックスフォードの古典学と古典教育について少し考えてみたい．最初に歴史的なスケッチを試み，次に古典教育の現状を簡単に紹介することにする．

2．古典学と古典教育の歴史[6]

今日の古典語教育の停滞が，けっして古典学自体の衰退を意味しないのと同様に，過去の古典語教育の盛衰は，必ずしも古典研究の興廃と一致してはいない．むしろ，古典語教育が衰えたときに，古典学の方は急速に発達したという場合が多い．例えばイギリスでは，近代古典文献学の基礎を築いた大古典学者 Richard Bentley（1662-1742）は，はじめケンブリッジに学んだが，その後 大学教師の職に就かず，38才で Trinity College（ケンブリッジ）の学長になってからも，古典の講義はしたことがなかった[7]．また 18世紀末に，Bentley の批判的方法を継承して原典研究の偉大な業績を残した Richard Porson（1759-1808）も，ケンブリッジのギリシア語の教授になったが，やはり講義は全くしなかったと伝えられる[8]．

16世紀

オックスフォードでは，16世紀はじめ（1517年），人文主義者エラスムスの影響で，Corpus Christi College が ヒューマニストの古典教育のセンターとして創設され，そこにギリシア語とラテン語の専任教師のポストが設けられた．その後，古典教育は他のカレッジにもしだいに広まったが，しかし，有能な学者は大学で古典語を教えず，むしろ神学や法律や医学の専門家になった[9]．Christ Church College の ギリシア語の Regius Professor も，1546年に新設された．だが，初代教授の Nicholas Harpsfield はすぐに辞

職し，２代目の George Etherege も，多才を誇ったが，古典に関しては大した業績を残さなかった[10]．

16世紀の古典教育は，主に人文主義者たちによって奨励された．だが大学（University）の教育課程の中では，古典教育はまだ中世のスコラ学の伝統と強く結びついていた．1549年に Edward ６世が制定した大学規則では，教養七学科を構成する文法，論理，修辞の３科（trivium）と 算数，幾何，音楽，天文の４科（quadrivium）のうち，文法（ラテン語）は廃止され，そのかわり修士課程にギリシア語が加わり，また教科書については，哲学ではアリストテレスに加えてプラトンとプリニウスが，医学にはヒポクラテスとガレノスが，論理と修辞にはアリストテレス，キケロ，クインティリアヌス，ヘルモゲネス，と古典が幅広く用いられた．ところがエリザベス１世の時代（1558-1603）になると，古い trivium と quadrivium が復活し，ギリシア語は 1564年に正規の教科からはずされた．

17世紀

17世紀に入ると，1636年に大司教 W.Laud の制定した規則によって，ギリシア語は大学の３年次の必修科目になった．カレッジでも，古典教育は引続き促進された．例えば Wadham College では，ラテン・ギリシア作家についての講義が毎週３回行なわれ，教員は全員ラテン語の詩を書けることが条件づけられた．17世紀の大学の主要教科は論理と倫理であり，古典語・古典学は概して，他の科目に対する補助的教科の地位にあった．しかし，古典語は大学の公式の言語として伝統的な役割を果していた．つまり，どんな講義も普通はラテン語で行なわれたし，試験は，1800年に英語の使用が認められるまではラテン語の口述試験だった．カレッジのホールでの夕食でも，この世紀まで会話はラテン語ですることが定められていた．また今日なお続いている６月の「エンカエニア（Encaenia）」という創立記念祭では，ラテン語の演説と詩の朗読が行なわれたし，その他王室の冠婚葬祭のときにも，ラテン語やギリシア語の詩による式典が挙行された．

このように 17世紀のオックスフォードでは，古典語の教養が大学生活のすみずみにまで浸透していたが，学問としての古典学は，まだ萌芽の状態であった．例えば，エリザベス 時代を代表する古典学者で，Merton College の学長だった Henry Savile (1549-1622) の業績は，タキトゥスの翻訳と4世紀の神学者クリュソストモスのテクストの編さんだった[11]．またMerton College のギリシア語 の講師から Regius Professor になった John Hales (1584-1656) は，「ギリシア語の正確な知識」をもっていて，Savile の仕事を助けたということ以外は知られていない[12]．さらに 17世紀後半のギリシア学者で教授になった Humphrey Hody (1659-1707) の講義は，主に西洋のギリシア語学者の業績史だった[13]．

18世紀

18世紀になると，大学の古典語教育は衰退した．講義では英語が用いられるようになり，大学のギリシア語の教授は，就任記念講演以外講義をしなくなった．そして，ギリシア語の教授職が閑職になるとともに，古典語の深い知識は，学位取得のために必要ではなくなった．だから大学での古典語学習の場はもっぱら カレッジだけになり，例えば Corpus Christi や Magdalen などで，古典語の作文，翻訳，講読のクラスがあったと記録されている．だが，概してその内容は貧弱であった．当時，詩人の Thomas Gray の友人で Richard West という人は，1735年にオックスフォードに入学したとき，「ここでは三段論法とビールが充満していて，ホラティウスもウェルギリウスも知られていない」と記しているし，18世紀の末にオックスフォードに来た歴史家の Fynes Clinton は，「ギリシア語教育は最低のレベルに落ちた」と書いている[14]．

この教育的衰退の事情は，ケンブリッジでも同じだった[15]．ところが，ケンブリッジ では，まさにこの教育的沈滞期に大学者 Bentley と Porson が出現したのである．一方オックスフォードでは，Lloyd-Jones 氏が「それまでに オックスフォードが生みだした最良のギリシア学者」と称賛してい

る[16] Peter Elmsley (1773-1825) が現われた. Elmsley は, Porson の近代的な原典研究の伝統を継承し, 主にギリシア古典劇のテクストの確立に大きな貢献を果した. 彼は大学では古代史の講座を担当したのだが, Bentley や Porson と同様, やはり古典語教育にはほとんど関与しなかった[17].

19世紀

さて, 時代は19世紀のヴィクトリア王朝期に入ると, オックスフォードの古典語教育は急速に立ち直りはじめた. この回復の最大の理由は, 大学の試験制度の抜本的改革である[18]. まず, 1800年に, 学士号取得のための唯一の試験が制定された. それは, 文法, 修辞, 論理, 倫理, 数学, 物理からなるもので, 受験者は科目の選択はできるが, 少なくとも3人以上の「最良の」古典作家に習熟していることが要求され, さらに英語を見て即座に口頭でラテン語に訳す能力が審査された. この古典の語学と教養をベースにした新しい試験制度は, その時から 'Literae Humaniores' と呼ばれ, 現在のオックスフォードの古典学部 (Faculty of Literae Humaniores) の母体となった.

この大学で唯一の試験は, その後まもなく, 1807年に2つのコースに分離した. 1つはギリシア語・ラテン語と 修辞, 倫理, 論理からなる Literae Humaniores で, 他は数学と物理のコースである. またこの年に, 口述審査に加えて, 筆記試験が始まった. 当時 Literae Humaniores を受ける学生は, ラテン語とギリシア語の作文 (散文) が必修で, さらに一般科目については, 今日でも行なわれているように, 自分が受験するいくつかの古典作品をあらかじめある程度選択することができた. 例えば, 修辞と倫理の部門では, アリストテレスの『修辞学』と『倫理学』は必須だったが, それに加えて『政治学』またはキケロの『義務論』やクインティリアヌスを選択することができた. 古典の部門で推せんされたのは, ホメロス, ピンダロス, ギリシア劇, トゥキュディデス, キケロ, ルクレティウス, アウグストゥス時代の詩人, リウィウス, タキトゥスだった. その後 1840年には, 推せん図書は3つの部門に分類された. まず「科学 (science)」の部門には, アリストテレス

の『修辞学』と『倫理学』の他，『政治学』と『詩学』，およびプラトンの著作がつけ加わった．「歴史（history）」の部門では，ヘロドトス，トゥキュディデス，クセノポンの『ヘレニカ』，リウィウス，タキトゥスの『年代記』と『歴史』，また「詩（poetry）」の部門では，ギリシア作家のホメロス，アイスキュロス，ソポクレス，アリストパネス，エウリピデス，ピンダロス，牧歌詩人，そしてラテン作家のプラウトゥス，テレンティウス，ルクレティウス，ウェルギリウス，ホラティウス，ユウェナリスであった．

概して Literae Humaniores は，設立当初から，古典をベースとしながらも，内容的には哲学が中心だった．だから倫理と論理は最も重要な科目で，とくにアリストテレスの『倫理学』は，今日に至るまで教科書としてつねに用いられてきた．プラトンが普及したのは，あとで述べる Jowett の功績である．それに対し，古代史は，19世紀の前半までは教育レベルも低く，試験では重要な分野ではなかった．だが 1850年に，さらに新たな試験改革が実施されると，歴史は主要科目としての地位を獲得した．

1850年の改革で，現在行なわれている形の試験制度が確立した．つまり，それまでたった１回だった学士号取得の試験（Literae Humaniores）が，前後２回の試験に分割されたのだ．第１次は，Honour Moderations と言われ（今日のいわゆる‘Mods’），ギリシア語・ラテン語の作文（散文と韻文），および古典文学と哲学・倫理学の記述式試験とからなる．古典作家の選択はやはり可能だったが，ホメロスとウェルギリウス，デモステネスとキケロの演説は必須だった．選択できる対象としては，文学は，アイスキュロス，ソポクレス，ホラティウス，歴史はヘロドトス，トゥキュディデス，リウィウス，タキトゥスの『年代記』が挙げられた．一方，第２次の最終試験は The Final Honour School of Literae Humaniores と呼ばれ（いわゆる‘Greats’），古典語の作文（散文のみ）と英訳，および哲学と歴史の論述とからなった．古典の英訳の対象としては，８つの著作をカバーすることが要求されたが，主に選ばれたのは，アリストテレスの『倫理学』，プラトンの『国家』，ヘロドトス，トゥキュディデス，リウィウス，タキトゥスだっ

た．だが一般に語学力重視の第１次とちがって，最終試験では主に論述の能力が評価の対象となる．それらのペーパーの課題は当時，論理，倫理，政治，哲学史，ギリシア史，ローマ史の６種類だった．

このような新しい試験制度によって，大学の古典語教育は急に活性化した．学生は，最終試験に優等（ファースト・クラス）で合格するために，入学時から一定の古典のテクストを繰り返し読み，それらを暗記するまでに消化に努めた．その状況は，ちょうど現代日本の大学入試の受験戦争を連想させる．もちろん，学生は単独で勉強していたのではない．彼らにとって，カレッジがいわば「予備校」になった．つまり，この頃から，どのカレッジでも教員（フェロー）の多くは学生の個人指導教官（チューター）になり，チュートリアルと呼ばれる個別的指導を熱心に行なうようになったのだ．そして，毎年発表される優等卒業生（「ファースト」）の数が，カレッジの名声を左右する重要な要素となった[19]．

こうして，19世紀のオックスフォードの大勢は，試験のための教育に傾いていった．この新たな傾向を大学で最も強力に推進したのは，プラトンの翻訳で知られる Benjamin Jowett (1817-1893) である[20]．Jowett は，1838年に Balliol College のフェローになり，1870 年には同カレッジの学長に就任した．彼は，古典学が大英帝国にとって有用な人材を育てるためのもっとも有力な手段だと確信し，学生の指導に精魂を傾け，非常に多くの学生を「ファースト」で卒業させて，Balliol を当時の第１級の政治家たちの母校にした．このような古典教育の理念は，例えば Bentley のような 18世紀の学者には想像もできなかったであろう．古典教育は Jowett によって，貴族的な偏狭さを打ち破り，いわば大衆性と社会性を獲得したのである．

だが，偉大な教育者 Jowett が払った犠牲も大きかった．彼のプラトンには誤訳が著しく多いが，それでも彼が 1855年から 38年間も ギリシア語の Regius Professor を兼任できたことからもわかるように，オックスフォードから優秀な学者が消えていったのである（Jowett は 教員の研究活動をあえて奨励しなかった）．それに，試験競争があまり激しくなると，教師や学

生の学問的探究心や創造的意欲は押しつぶされるのかもしれない（ちょうど，受験戦争を勝ち抜いた多くの日本の若者が大学に入って勉強する気をなくすように）．じじつ，19世紀中頃のオックスフォードでは，この古典語教育の「好況」とは裏腹に，18世紀以来の緻密なテクスト研究の伝統は凋落した．

たしかに，19世紀 のはじめには，Jowett の前に Regius Professor になった Thomas Gaisford（1777-1855）のような人物もいた．Gaisford は，膨大なテクスト編さんの業績を残している（じつはこの学者も，前世紀の有能な人々と同様に，学生に講義をしようなどとは一度も考えなかったからよい仕事ができたのだが）[21]．また Jowett と同時代に，学問の衰微を嘆き，なんとか それを 食い止めようとした 少数の人々の中に， John Conington（1825-1869）がいる． Conington は，アイスキュロスのテクストで名をなし，のちには Corpus Christi のラテン語の教授になって，クラスで学生を指導しながら，ウェルギリウスとペルシウスのテクストの制作にも精力を注いだ[22]． さらに， カレッジの長を兼ねながらギリシア語の辞書を作った Balliol の R.Scott（1811-1887）と Christ Church の H.G.Liddell（1811-1898） もこの時代の人だ[23]．

だが，全般的には，この時期の研究は低調だった．ケンブリッジでも，同じ時期にほぼ同様の試験制度が発足したので[24]，事情は似かよっていたようだ．20 世紀初頭の古典文献学の俊英 A.E.Housman（1859-1936）は，この時期をふりかえって，Porson の伝統を継いだ「Elmsley（オックスフォード）と Dobree（ケンブリッジ）が墓場に入った 1825年という年に，Bentley に始まるわれらの偉大な学問の時代は終焉を告げた」と述べている[25]．また Lloyd-Jones 氏も，「この Housman の言葉を大げさだと思うなら， 図書館で例えば 1820年から 40年頃に出た古典の本を見たまえ．質の低下は一目瞭然だ」と言っている[26]．

しかし研究の停滞は，試験制度と受験教育だけが原因だったとは言えない．産業革命後の海外進出の時代に，厳格で狭隘な文献学的研究の方法自体が，新しい世代の人々に対してアピールする力を失ったのだ．このことは，20世

紀が近づくにつれて，いっそう顕著になった．

1893年に Jowett が亡くなると，アリストテレス学者の Ingram Bywater (1840-1914) がギリシア語の Regius Professor になった．Bywater は，U.von Wilamowitz-Moellendorff が 'History of Classical Scholarship' で高く評価したように[27]，ドイツの文献学，とくに Jacob Bernays の方法に学び，アリストテレスなどのテクスト研究の分野では卓越した業績を残した．すでに Jowett の先例があったので，ギリシア語の教授として彼が講義をしたことは，べつに画期的なことではなかった．だが，Bywater が試験のための教育に関心がなかったことは，Jowett が苦心して予算をつけた試験のための講堂（Examination Schools）にかかげるモットーを求められたとき，彼が 'Multi pertransibunt et non augebitur scientia.' と言ったことからも想像できる[28]．また，Jowett がいつも学生に「テクストを論じるな．良いテクストを買え」と言ったのに対して，Bywater は講義で，ドイツの学者と対等の立場にたって原典批判を論じた[29]．これは，オックスフォードの古典教育史上新しい姿勢である．しかし，学生たちの反応は微妙だったと言われる．彼らは，その講義に深い感銘を受けながらも，Bywater の厳密な議論にはついていけなかったのである[30]．

ドイツの文献学の影響を受けたもう１人の学者は，Corpus Christi のラテン語の教授になった Henry Nettleship (1839-1893) である．彼はウェルギリウスのテクスト研究を行ない，のちにラテン語大辞典の作成に取り組んだが[31]，教授としての彼の講義にはあまり学生が集まらなかった[32]．大部分の生徒は，細かい語義の詮索よりも，やはり実用的な試験勉強の方を好んだようだ。

20世紀

このように伝統的なテクスト学に対する不満がつのる中で，20世紀が到来した．1908年に Bywater は引退し，かわってギリシア語の教授になったのは，Gilbert Murray (1866-1957) である．Murray については，すでに多く

の記事や書物が 書かれており， 最近は かなり詳しい伝記も 出版されたから[33]，ここで改めて述べる必要はないかもしれない．ただここでは，教育と研究のあり方について問題にしているので，それに関する2，3の点にのみふれておきたい．

まず， Murray の登場によって，これまで相対立していた古典教育と古典学とを調和させ，両者の均衡を保とうとする努力がなされた．例えば，Murray 自身，著作の大部分は実際に行なった講義にもとづいて書いた．そして彼は講義では， 文献学の専門家に教えるような同時代の Housman の講義とは対照的に[34]，古典から学びたいと思うどんな人にも理解できるように教えた[35]．とくにギリシア悲劇に関心をもった Murray は，エウリピデスのオックスフォード版のテクストを作ったが，講義ではテクストはたんなる作家のメモにすぎないと説き，ギリシア劇の上演を視覚的に説明することに努めた（実際，彼の訳によるエウリピデスはロンドンの劇場で何度か上演された[36]）．また，彼はテクストの背後にある古代人の考え方や宗教的体験に注目し，オックスフォードの学生たちとともに研究した原資料（サルスティウス）をもとにして，1912年にコロンビア大学で古代ギリシア宗教についての人類学的な講義を行なった（‘Five Stages of Greek Religion’）[37]．

Murray はこのように， 翻訳や古代論でつねに古典と現代の問題とを結びつけようとした．だが，それだけいっそう，彼の文体や論旨は急速に古び，今日では 時代を拒否した Housman の業績の方が風雪に耐えていると言われている[38]．しかし，Murray が示した教育・研究者としての新しい姿勢は，現在でもオックスフォードでは感化を与え続けているし，また劇の視覚化や古代人の非理性的要素に対する視点などは，今日でも重要な研究テーマになっている[39]．

抜群のバランス感覚の持ち主だった Murray は，古典学が偏狭な学者の世界に閉じ込もることを警戒した．だから彼は，積極的に講義をし，著作やラジオの電波を通してイギリスの一般市民に語りかけたのだ．さらに彼は，オックスフォードの教授としての職務のかたわら，ヘレニストとしての見識を

難局に立ったヨーロッパ世界に対して役立てるべく，たびたび重要な政治的発言を行ない，第1次世界大戦後にはイギリスの国際連盟協会の結成に中心的役割を果たした[40]．だが，Murray のリベラルな政治的行動によって最も恩恵をこうむったのは，たぶんオックスフォード大学自身だろう．

Lloyd-Jones 氏はよく冗談に，ヒトラーはイギリスの古典学の恩人だという[41]．なぜなら，ナチスのユダヤ人迫害によって，多くの優秀な古典学者がイギリスに亡命したからだ．そして，これらの亡命者をただちに援助し，彼らがオックスフォードのさまざまなポストに落ち着くよう手配したのが，Murray である[42]．実際，第2次大戦中のオックスフォードは，19世紀のベルリン に劣らぬほど 多くの古典学者で 活況を呈した．すなわち，J.D. Beazley とともに 古典考古学 に 新たな生命を 吹き込んだ Paul Jacobsthal[43]，ギリシア史家断片集 の大著を執筆中の Felix Jacoby[44]，Corpus Christi のラテン文学の教授として学生にも教師にも深い影響を与えた Eduard Fraenkel[45]，オックスフォード出版局 を中心に原典批判の仕事で活躍した Paul Maas[46]，E.Lobel とともにカリマコスの未刊のテクストに取り組んだ Rudolf Pfeiffer[47] などが，オックスフォード を仕事場にすると同時に，従来大陸の古典学の動きにあまり関心のなかったオックスフォードの古典学者たちに，ドイツとの学術交流の基盤を作った．Murray 自身，以前から Wilamowitz を尊敬し，1894年以来ずっと文通していたのだが[48]，結局その島民気質の少ない広量な精神が，戦争という皮肉なきっかけによって，オックスフォードの古典学に新たな窓を開いたのだと言える．

Murray の在任中には，他の点でも古典学研究の進展は著しかった．今世紀の初頭に Grenfell と Hunt によって 発見された Oxyrhynchus パピルスの復元と校訂は，当時 E.Lobel (1888-1982) によって引き継いで推進され，その後数々の新しいテクストを公表しながら，現在その刊行物は約 50巻に達している[49]．この Lobel が行なったパピルスの校訂の方法はじつに慎重かつ客観的で，以後この種の作業のモデルを提供した[50]（現在この作業は P.J.Parsons 氏を チーフ・エディターとして続けられているが，私はそ

の共同研究に参加して，彼らの忍耐力の偉大さに感銘を受けた[51]）．またその時期には，Arthur Evans（1851-1941）が 1900年からのクレタ島発掘の成果をまとめつつあり，彼は 1938年にはアシュモレアン美術館の名誉館長としてミノア文明の展示室を設営した[52]．さらに当時，教育的負担の大きいカレッジのチューターたちの中からも，質の高い研究成果が次々と生み出された．例えば，J.U.Powell の‘Collectanea Alexandrina’（1925），A.W.Pickard-Cambridge（1873-1952）の‘Dithyramb, Tragedy and Comedy’（1927），J.D.Denniston（1887-1949）の‘Greek Particles’（1934），そして若き C.M.Bowra（1898-1971）や D.Page（1908-1978）の一連のギリシア詩研究などがそれだ．

このように，Murray の在任期間は，オックスフォードの古典学と古典教育にとって黄金時代だったといえるかもしれない．学問と教育の調和，古典学の国際化，研究の飛躍，それらが一度に実現したからだ．だが，アウグストゥスのローマの黄金時代がそうだったように，歴史の中の黄金時代は，卓越したリーダーの努力によって全体のバランスが奇跡的に維持された時期であって，その時すべての現実的な問題が解決していたわけではない．例えばその１つは，ギリシア語教育の問題だ．

オックスフォード大学の入学試験で，ギリシア語はラテン語とともに従来必須科目だった．学生は入学後に何を学ぶにせよ，ギリシア語の試験にパスしなければならなかった．Winston Churchill は，若い頃オックスフォードで歴史を勉強したいと思ったが，ギリシア語の試験のためにそれを断念しなければならなかった[53]．一方現首相の Margaret Thatcher が化学を学ぶために 1942年にオックスフォードを受験したとき，ギリシア語はすでに必修ではなく，古典語はラテン語だけだった．そのため 16才の彼女はラテン語を１年間（！）必死で勉強した[54]．たぶん Thatcher のように意志の固い人物なら，ギリシア語が必須だったとしても，歯をくいしばってそれを克服しただろう．しかし現代のイギリスでは，Thatcher のようなタイプは例外だ．じじつ，Murray がギリシア語の教授になった翌年の 1909年に，オッ

クスフォードの入学試験ではギリシア語は廃止せよという声が上がった.

この問題に対して, Murray は一貫して廃止説を支持した[55]. 志願者全員にギリシア語を課することは, かえって古典に対する偏見と反発を招くと判断したからだ. つまり, 難解さのゆえにギリシア文化がうとまれるよりも, たとえ翻訳で読まれても広く愛好される方が, 古典教育の本来の目的にかなうものだと考えた (Murray 自身は ギリシア語の詩や散文をよく書いたが, それはたんに知力を鍛えるためで, 作文に沈溺することはなかった[56]). そして彼は, 廃止を補うために, 入試での古典語の選択制 (ギリシア語かラテン語か) や, 古典や歴史や英語などの受験者だけに対するギリシア語の一部必修制を提案した. だが, 実際ギリシア語を廃止すれば, その効果はやがてラテン語にもおよび, いずれは大学の古典語教育は削減されるかもしれないという心配が多くの古典語担当者の中にあった. 結局, Murray の支持した必修廃止論は大学の教職員総会で猛反対に遭い, ギリシア語は 1920年まで全員必修の受験科目から消えなかった.

ここで問題になった語学教育とヒューマニスト教育とのジレンマは, 今日なお古典教育界が直面する最大の難題である. そして同じような種類の問題は, 古典学研究自体の中にも存在する. Murray は, 古典語の深い学識と広い人間的関心とを結合・調和しようと努めた. この努力が Housman と対照的だったことはすでに指摘したとおりだ[57]. だが, Murray の新しい努力がギリシア文化を人々により身近なものにした反面, その研究成果の多くの部分が恒常的な生命力を保てなかった. 彼の仕事はテクストの校訂や断片の復元よりははるかに困難な性質のものだったし, 彼自身, そのような努力こそ, Wilamowitz が 1908年にオックスフォードの人々に暗示した使命だと考えた[58]. しかし Wilamowitz は, その年の秋に教授に就任した Murray に対して, 古くて堅実な文献学の伝統がイギリスから消え去ってはならないという警告を与えた[59]. こうした問題は, おそらく Murray だからこそ起こったとも言える. しかし, その後彼のあとを継いだ2人のギリシア学者もまた, この問題を深く意識しないわけにはいかなかっただろう.

1936 年に Murray の後継者として E.R.Dodds (1893-1979) がオックスフォードにもどったとき，この新任教授は，Murray よりは Bywater にいっそう近い，文献学者肌の研究者だと思われた[60]．だが，Dodds は就任講演で，「学者が一般の人々に語りかけないならば，学問と社会のみぞはますます深まり，真実は死に迷想は広がるだろう」と明言した[61]．その後の Dodds の著作の中には，自叙伝[62]を除いて一般の読者のためだけに書かれたものはないように見える．しかし，『バッカイ』や『ゴルギアス』の注釈書にせよ，『ギリシア人と非理性』や『古代人の進歩の概念』のような研究書にせよ，Dodds はギリシア語の専門家として原典や資料に細心の注意を払いながらも，古代の中に現代の問題の根源を探ろうというヒューマニストとしての一貫した姿勢をつらぬいた[63]．

最後に，Murray の孫の世代に当たる Lloyd-Jones (1922～) については，冒頭で若干ふれた．Lloyd-Jones もまた，1961年の就任講演でヒューマニストとしての自己の立場を表明した[64]．そのとき彼は，古典学者には一般読者，学生，そして自分の研究課題とに対する合計３つの義務があると述べ，今日の課題を次のように整理した．すなわち，まず，現在古代に対する一般の関心が高まる中で，ちょうど Dodds が Murray の播いた種を収穫し，その成果には現代人の勝手な解釈の結果だとは言えない真実の断片が含まれているように，現代の学者は厳しい批評力によって，たんなる通俗化ではない，古代についての真の理解を読者に提供するよう努めるべきだと説く．また大学教育については，歴史と哲学の学習が古典語の訓練とますます切り離されていくのは正常ではないとして，作文の時間を短くするなど，古典語の学習をもっと能率よく行なう方法を提案している．さらにリサーチについては，カレッジのチューターたちから教育の過重負担を軽減することが先決問題で，それを実行するには大学の科学偏重の予算がまず修正されるべきだが，同時に，オックスフォードの研究者は Housman のごとき熱意で，生産高を増すばかりでなく，最高の学問的レベルを維持する努力を続けなければならないと述べている．この Lloyd-Jones の展望は，たしかに多少欲ばりすぎた感

がある．しかし，少なくとも彼はここで，Murray 以来顕在化したヒューマニズムの学問・教育としての現代の古典学の現実的諸問題を的確に要約している．当時 39才の Lloyd-Jones 教授は，28年後に，イギリスの古典人文主義の中心的役割を担うそのポストに新人を迎えられない事態が起きようとは，まさか予想できなかっただろう．だが，この「事件」は，けっして Lloyd-Jones の公約不履行を意味するものではない．一般読者と研究に対する義務についてはまだ結果は出ないが，教育上の課題は着実に実行されている．むしろ，この「事件」は時代の試練であり，彼の抱負が本当に実現したかどうかは，オックスフォードの学者たちや一般のイギリス人の今後の動きにかかっているであろう(65)．

3．古典教育の現状(66)

現在オックスフォードの古典学部（正確には人文学部：Faculty of Literae Humaniores）は，教育・研究スタッフとして前述の教授９名と，助教授（reader）３名，講師（lecturer）約 100名を有し，学生数は学部学生（undergraduate）約 550名，大学院生（graduate）が約 100名である．学部学生の量からみると，16の学部中，社会学，英語，近代史，法律，近代諸語に次いで第６位の規模だが，なぜか古典学部にはセンターとなる独立した建物がないため（現在構想中と聞く），スタッフと学生は 34のカレッジに分散し，それぞれのカレッジを拠点にして教育と研究に従事している．例えば私の所属した Balliol College では，古典語の講師２名，古代史の講師１名，哲学の講師２名で，古典学部の学生は全部で 30名ほどいた．

前章でもふれてきたが，オックスフォードの古典教育の特徴は次の３つの点に要約できるだろう．つまり，第１にカレッジでのチュートリアル（個別指導）が大きなウェイトを占めていること．第２に，特殊的・専門的教育よりも総合的教育を重視すること．第３に（これは第２の点とも関連するが），基本的に古典の学習をギリシアとラテンに分離しないことだ．まず，第１に

挙げたチュートリアル方式のため，学生はみな所属カレッジのチューターにつき，ほぼ毎週エッセーを書いて，それにもとづいて教師と議論する．学部つまり大学の方は，全学的な講義を主催し，試験を実施して学位を授与するが，単位制でないため，学生は講義やセミナーに必ずしもまじめに出席する必要はない．しかもすでに述べたように，大学の試験は卒業までの４年間に２回あるだけで，そのうえ２年次の試験（Mods）は，語学力や自分の適性を見るための予備試験的な性格が強い．そのため，学生はたいてい卒業試験の‘Greats’により精力的にうちこむ．‘Greats’の結果は，１級（ファースト），２級（セカンド），３級（サード）の３ランクで発表されたのち，イギリスの全国新聞で報道されて，卒業後の就職の際，官公庁や企業の採用の重要な目安になる（予想の成績以下で卒業した学生は，就職を取り消されるか，待遇を引き下げられる場合もある）．一方カレッジにとっては，この卒業試験で何人「ファースト」を出すかが「名誉」を決定する大きな要素になることは，19世紀以来変わっていない．だから，カレッジのチューターは，たいてい真剣にチュートリアルに取り組んでいる．その際，学生と教師にとって当面の競争相手は同じ大学の他のカレッジなので，この状況はちょうど，毎春卒業試験の前にテームズ川で繰り広げられるカレッジ対抗のボート・レースさながらだ．学生の個別指導を担当するカレッジのチューターは，いわばメガホンをもたされたソクラテスといったところか．

ところで，近年の大学の発表によると[67]，1980年から 85年の６年間に Literae Humaniores の最終試験を受けて卒業した学生 合計 762名のうち，卒業後すぐに定職に就いたのは 619名で，全体の 81.2% だった．この比率は，他のすべての文科系の学生の就職率の 80.2% を少し上回っていた．就職先の業種で最も人気があったのは，銀行，証券ビジネスなどの商業関係で，19.5%（この数字も，他の文科系の 15.9% をしのぐ）．次に 会計・経理（11%），法曹関係（6.9%），製造業（4.5%）の順になり，これ以外にも，大学院生や研究所員になる人が 14.5%，教職につく人が 10.7% だった．意外にも，公務員は 3.8% と少なく，それに対し，少数ながらレジャー産業

2.7% というのは何を物語るのか，大学側も首をかしげている． 全体としては，実業界で働く人が多く，古典教育がまだ産業界の中枢と密接につながっていることを印象づけている．

オックスフォードの古典の卒業生の多くが，金融・商業部門などの実業界に進出していることは，１つにその教育内容とも関係があるように思われる．そこで次に，現行のカリキュラムの中に見られる特徴を考えてみよう．

大学の講義とセミナーは，２つの試験の中味に対応する内容で行なわれる．まず１，２年次を対象とする Mods のコースは，語学と文学と専門的課題とからなる．そのうち語学では，ギリシア語・ラテン語の即席の英訳（unseen）（必須），散文か韻文のギリシア語かラテン語の作文またはギリシア語・ラテン語のテクストの評釈問題（選択）が出され，文学ではホメロスとウェルギリウス（必須）， ヘシオドスからルキアノスにいたる 12のギリシア作家のうち５題（選択）， テレンティウスからペトロニウスにいたる 12のラテン作家のうち５題（選択）が出題され，それぞれ英語の部分訳と論述式問題で試される．最後の専門的課題は，文学，歴史，比較言語学，考古学のうち１課題と，初期ギリシア哲学から現代形式論理学までの哲学的課題１題とからなる． それらの特殊課題は， 例えば，「アリストパネスの政治的喜劇」「ヘロドトスとアイスキュロスにおけるペルシア戦争」「カティリーナ事件の歴史的背景」「ホメロス詩の考古学的背景」「プラトンと文学についての哲学」などに関する論述である．

このように‘Mods’では，ギリシア・ラテンの２つの言語の学力と文学的批評力を見るのが主眼だが，同時に歴史と哲学に対する理解力も試されている．一方４年次の‘Greats’では，重点はテクストを読む能力から論述力に移っていくが，この試験でもやはり，歴史か哲学の教養は不可欠だ．

‘Greats’の全受験者は，歴史，哲学，文学の３つの部門のうち， 少なくとも２つの部門にわたる一連の問題に取り組む．まず歴史部門を採るものは，ギリシア史 （776-403 B.C. または 446-323 B.C.）１題，ローマ史 （241-44 B.C. または 146 B.C.- A.D. 54 または 43 B.C.- A.D. 117）１題， そ

して古代史一般１題の３つの試験を受ける．歴史の問題ではどれも，ヘロドトスやトゥキュディデス，あるいはキケロやタキトゥスなどのテクストが提示され，受験者はそのテクストにもとづいて歴史的事件を解説し，そこに含まれた政治や社会，経済，宗教上の関連や問題点を，それぞれ独自の視点で論じることが求められる．次に哲学部門は，古代哲学と論理と倫理・政治学の３つの問題に分かれる．古代哲学で出題される主なテクストは，プラトンの『国家』とアリストテレスの『ニコマコス倫理学』で，いずれも原語で読めることが条件である．論理の問題では，‘Mods’のように形式論理は扱わず，「意味」「必然性」「因果関係」「蓋然性」「存在」「真理」といった基本的概念や，「感覚に関する諸問題」などについて，抽象的な思考力が問われる．この試験を受けるには，近代哲学の知識が必須であり，さらに倫理・政治学の問題でも，「倫理的判断の論理的基礎」とか「功利主義」，あるいは「人間の行動の性質」「責任」「意志の自由」「政治的・法的義務」「権利」「正義」といった近代哲学の重要な主題について問われる．最後の文学部門の試験は，ギリシア作家３題，ラテン作家３題と専門的主題とからなる．このうちギリシア語とラテン語の問題は，あらかじめ指定されたテクストのリストの中から選択できるが，それぞれ翻訳と評釈に加えてエッセーも求められ，また作家３題の組合せも，例えばウェルギリウスとカトゥルスとウァロのように関連のあるものでなければならない．文学の専門的主題のリストには，「ギリシア・ラテンのテクスト」（原典批判），「古代の文芸批評」（とくに，アリストテレス，ホラティウス，ロンギノス），「ギリシア抒情詩」，「ギリシア新喜劇とローマ劇」，「ギリシア考古学：510-323 B.C.」，「ローマ帝国の都市と植民地」，「アウグスティヌスの改宗」，「中世ラテン語」などが挙げられている．

以上のように，‘Greats’は古代文明・古代文化についての全般的知識とともに，現代人の行動原理に関する見識や言語表現力を問う総合的な性格の試験である．学生はさまざまな古典のテクストを読みながら，時代や社会や思想の本質的問題をとらえ，それらを自分の文章で議論する訓練を課せられ

ている．おそらく，イギリスの企業がオックスフォードの古典の学生に期待するのは，こうした訓練によって養われた知的能力なのだろう．基礎的学力と判断力さえしっかりしていれば，経済や金融などの実際的知識はあとでも身につくというのが，まだ彼らのもっている考え方なのだ．

ところで，チュートリアルは，このような試験を受けるのに最も都合のよい教育システムだということがわかるだろう．学生はチューターに毎週見せるエッセーで，文章の書き方というものを徹底的に仕込まれる．またペーパーを読み上げる場合，その作法も，普通１時間という制限時間内に序論から結論までをカバーできるように仕つけられる（オックスフォードに限らず，イギリスでは研究発表の時間制限に対するマナーは，不思議に誰でもよく守っている）．一方教師の方は，文章指導も大変だが，古典学に対しても万能の力を要求される．実際には，個々の教師にはもちろん得手不得手があり，何でも教えることは不可能だ．そのために，大学主催の講義とセミナーがある．しかし，どの講義やセミナーに行くべきかを学生に推せんするのは，チューターの重要な役割だ．だからチューターは，古典学全般にわたる基礎的知識を身につけていて，各分野の研究動向や専門間の関連を一応頭に入れていなければならない．この点興味深いのは，最近ケンブリッジから出た‘The Cambridge History of Classical Literature’という２巻本の古典文学史に対抗して出版された，‘The Oxford History of the Classical World’（1986）である．前者は，作家別の文学研究の比較的詳しい入門書だが，後者はテーマ別に編集されており，歴史・哲学・文学を包括する古代文化の総合的な解説をねらっている．また話はややさかのぼるが，Housmanがオックスフォード在学中から古典の詩の研究に熱中し，‘Greats’の受験のとき歴史と哲学の答案をほとんど白紙で提出して不合格になった話は有名だ[68]．そして彼がその後文献学の専門家としての自己の主義をつらぬき，結局ケンブリッジのTrinity Collegeにフェローとして受け入れられたことは，彼の個性を表わすとともに，この２つの大学の古典科の性格をも端的に示す１つの例になるだろう．

しかし，オックスフォード が優秀な文献学者の Housman と縁がなかったからといって，テクストを読む能力を低く評価しているのではないことは，２つの試験の内容からも明らかである．学生はギリシア語とラテン語の両方を読みこなせなければ，試験に合格できない．また古典の教師も，たいてい身分はカレッジの 'Fellow and Tutor in Classics' であり，ギリシア語もラテン語も教えている．むしろ，両方をマスターすることが卒業の最低条件であるように，両方教えられることが，カレッジのチューターになる必要条件だ．だから，とくに若手のチューターたちは，ギリシア語は読めてもラテン語やラテン文学に関心のない学者，またはラテン語は教えてもギリシア文学を読まない研究者は，よその大学で「プロフェサー」にはなれても，オックスフォードでは「レクチャラー」にはなれないし，学生も教えられないのだという強い自信と誇りをもっている．そして，こうしたチューターの中には，学問的にもギリシア文学とラテン文学の両方を研究課題にしている人も多い．例えば，私の見る限りでは，J.Griffin (Balliol)，R.B.Rutherford (Christ Church)，G.O.Hutchinson (Exeter)，D.P.Fowler (Jesus) などは，そのような「二刀流免許皆伝」の中堅の研究者の代表格だ．現在のオックスフォードの総合的な古典教育は，実質的には，このような古典学全般に対して意欲をもった学者たちが先頭に立って推し進めているようである．そして，今年 Lloyd-Jones 教授が去り，さらに３年後にはラテン文学の Nisbet 教授が任期満了を迎えるという転換期の中で，将来のオックスフォードの均斉のとれたヒューマニスト教育を支えていくのもまた，ギリシアとラテンに通じ，柔軟で深みのある教育・研究指導のできるこうしたオール・ラウンドな学者たちであることは確実である．

〔校正時の付記〕 —— 本報告作成後に，第１章で述べた「事件」に関して，新しい動きがあった． それは，今秋退職する Lloyd-Jones 氏の後任として， Peter J. Parsons 氏（パピルス学専攻）が任命されることになり，女王が最終的にそれを認可したことである （「タイムズ」 紙，1989年 3月

24日）[69]．この決定についての詳細は不明だが，イギリスでは数ヶ月前から政府の一連の大学経費削減策に反対して，全国の大学の教員層が試験採点のボイコット運動を行なっていた．おそらくイギリス政府は，このような強い抵抗に対処するため，オックスフォード大学に対しても昨年の決定を撤回したものと推測される．いずれにしても，オックスフォードのギリシア語の教授が欠員になる事態は結局回避されたようだ．　（1989年 6月 4日）

注

(1) 本稿は，1988年 12月 23日の 京大西洋古典研究会（於京大会館）で行なった帰朝報告「オックスフォードの古典学研究の現状について」の一部にもとづいて，その後書きあらためたものである．

(2) Joint Committee of Greek and Roman Societies: Triennial Meeting, Oxford 25th-29th July 1988.

(3) H.Lloyd-Jones, Blood for the Ghosts. Classical Influences in the Nineteeth and Twentieth Centuries, London 1982, 10-12, 25-31; Id., Classical Survivals. The Classics in the Modern World, London 1982, 52-55, 60-63; Cf. Id., 《Introduction》 to History of Classical Scholarship (by U. von Wilamowitz-Moellendorff), London 1982, xxix-xxxii.

(4) 森嶋通夫氏は近著『サッチャー時代のイギリス』（岩波新書，1988年 12月）の中で，現政府の利潤追求の原理と効率主義が大学運営の中にまで浸透してきている現状を報告している（pp.150-155）．またオックスフォードでは，その政策に反発し，1985年に首相への名誉博士号の授与を拒否したことが（cf. 同著，p.135），事態をいっそう悪化させている．

(5) G.B.Kerferd, Students in Classics in British Universities: A

Statistical and Critical Survey, G&R 23 (1976), 111-117; G.Eatough, Classics at British Universities, 1986-87: Statistics, Bulletin of Council of University Classical Departments 16 (1987), 35-39.

(6) この章を書くにあたって，基礎資料として用いた参考文献は以下の通りである．以下の注では著者名のみ記す．

M.L.Clarke〔1〕, Greek Studies in England 1700-1830, Cambridge 1945.

Id.〔2〕, Classical Education in Britain 1500-1900, Cambridge 1959.

Dictionary of National Biography (=DNB), Oxford.

The History of the University of Oxford, vols.Ⅲ&Ⅴ, Oxford.

J.Jones, Balliol College. A History: 1263-1939, Oxford 1988.

H.Lloyd-Jones〔1〕, 《Introduction》 to History of Classical Scholarship (cf. 注 3).

Id.〔2〕, Blood for the Ghosts (cf. 注 3).

R.Pfeiffer, History of Classical Scholarship from 1300 to 1850, Oxford 1976.

A.L.Rowse, Oxford in the History of the Nation, London 1975.

R.Symonds, Oxford and Empire. The Last Lost Cause?, New York 1986.

J.E.Sandys, A History of Classical Scholarship, vols.Ⅱ&Ⅲ, Cambridge 1908.

U.von Wilamowitz-Moellendorff, History of Classical Scholarship (cf. 注 3).

(7) Clarke〔1〕, 48-50; Id.〔2〕, 73; Lloyd-Jones〔1〕, viii-ix, xxi; Pfeiffer, 143-158; L.D.Reynolds & N.G.Wilson, Scribes and Scholars, Oxford 1974, 166-170; Sandys, Ⅱ, 401-410; Wilamowitz, 79-82.

(8) Clarke〔1〕, 67-76; Id.〔2〕, 73; Lloyd-Jones〔1〕, xxi; Pfeiffer, 159-161; Sandys, Ⅱ, 424-430; Wilamowitz, 83-84.

(9) Clarke〔2〕, 30.

(10) Clarke〔2〕, 28.

(11) Sandys, Ⅱ, 333-336.

(12) Sandys, Ⅱ, 352.

(13) Clarke〔2〕, 62.

(14) Clarke〔1〕, 25-26, 33; Id.〔2〕, 72.

(15) Clarke〔1〕, 25; Id.〔2〕, 68-73.

(16) Lloyd-Jones〔2〕, 14, cf. 81, 93-94, 101.

(17) Clarke〔1〕, 32, 227-228; Pfeiffer, 161; Sandys, Ⅲ, 394-395; Wilamowitz, 84.

(18) Clarke〔1〕, 34; Id.〔2〕, 98-103, 111-115.

(19) Cf. Jones, 185-191.

(20) Clarke〔2〕, 103, 115; DNB: 'Jowett'; Jones, 202-224; Lloyd-Jones〔2〕, 16-19; Rowse, 186-193; Symonds, 27-29; Sandys, Ⅲ, 418-420. Jowett の教育理念については, さらに cf. 小川正広「オックスフォード大学の古典学の一側面」(『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第10巻, 1989年 3月, pp.178-197).

(21) Clarke〔1〕, 97, 99-100; Id.〔2〕, 102; Lloyd-Jones〔2〕, 14-16, 81-102; Pfeiffer, 153; Sandys, Ⅲ, 395-398; Wilamowitz, 76, 85.

(22) Clarke〔2〕, 114-116; Lloyd-Jones〔1〕, xxi-xxii; Id.〔2〕, 15-16; Sandys, Ⅲ, 422-423, 434-435.

(23) Scott: Lloyd-Jones〔2〕, 16; Jones, 190-203; Sandys, Ⅲ, 418. Liddell: Lloyd-Jones〔2〕, 16, 85-86, 100-101; Sandys, Ⅲ, 418.

(24) ケンブリッジの試験制度 (Classical Tripos) については, cf. Clarke〔1〕, 34-39; Id.〔2〕, 98, 104-110; 120-127.

(25) A.E.Housman, M.Manilii Astronomicon Liber Primus, 2nd ed.,

Cambridge 1937, xlii.

(26) Lloyd-Jones〔2〕, 15. Cf. Wilamowitz, 137.

(27) Wilamowitz, 143-144.

(28) W.W.Jackson, Ingram Bywater: the Memoir of an Oxford Scholar, 1840-1914, Oxford 1917, 70-71; cf. Lloyd-Jones〔2〕, 101-102.

(29) Jackson, op.cit., 67-68; cf. Clarke〔2〕, 117.

(30) Clarke〔2〕, 117; Lloyd-Jones〔2〕, 18-19; DNB (1912-1921), 'Bywater', 83.

(31) Sandys, Ⅲ, 453-436.

(32) Clarke〔2〕, 117-118.

(33) D.Wilson, Gilbert Murray OM: 1866-1957, Oxford 1987.

(34) ロンドン と ケンブリッジ での Housman の講義については, cf. A.S.F.Gow, A.E.Housman, Cambridge 1936, 17-19, 42-47, 60-61.

(35) I.Henderson, The Teacher of Greek, in Gilbert Murray. Unfinished Autobiography, ed. by J.Smith & A.Toynbee, London 1960, 125-148 (とくに 144).

(36) Cf. S.Thorndike & L.Casson, The Theatre and Gilbert Murray, in G.M. Unfinished Autobiography, 149-175.

(37) Wilson, op.cit., 158-162; Henderson, art.cit., 140-141.

(38) Cf. Lloyd-Jones〔2〕, 19-20, 28.

(39) Cf. Lloyd-Jones〔2〕, 210-211.

(40) DNB (1951-1960), 'Murray', 759-760; S.de Madariaga, Gilbert Murray and the League, in G.M. Unfinished Autobiography, 176-197; 小川, art.cit.; Rowse, 224-226; J.Smith, 1889-1957: Some Personal and Chronological Notes from the Correspondence, in G.M.Unfinished Autobiography, 104-116; Symonds, 91-93; Wilson, op.cit., 177-192, 217-268, 283-310, 331-409.

(41) Cf. Lloyd-Jones, Classical Survivals, 17, 60.

(42) Lloyd-Jones〔2〕, 21; Wilson, op.cit., 320-321; 347-351.

(43) Lloyd-Jones〔2〕, 21, 253-254.

(44) W.Theiler, Felix Jacoby, Gnomon 32 (1960), 387-391; Lloyd-Jones〔1〕, xxv.

(45) DNB (1961-1970), 'Fraenkel', 389-391; Lloyd-Jones〔1〕, xxv; Id.〔2〕, 22, 251-260.

(46) Lloyd-Jones〔2〕, 22, 213, 215-218, 254, 265-266.

(47) Lloyd-Jones〔1〕, xxviii-xxxi; Id.〔2〕, 22, 216, 261-270.

(48) Lloyd-Jones〔2〕, 199-201; Wilson, op.cit., 54-56, 128-129.

(49) Cf. Reynolds & Wilson, op.cit., 177-179.

(50) Lloyd-Jones〔2〕, 20-22, 265-266; Id., Classical Survivals, 54.

(51) Parsons 氏はミシガン大学の H.C.Youtie にパピルス学を学び，現在オックスフォード大学のパピルス学の専任講師.

(52) DNB (1941-1950), 'Evans', 240-243.

(53) Cf. C.M.Bowra, Memories: 1898-1939, London 1966, 331.

(54) Cf. 黒岩徹『闘うリーダーシップ　マーガレット・サッチャー』，文藝春秋社　1989年 4月，32-35.

(55) Henderson, art.cit., 141; Wilson, op.cit., 150-153.

(56) Henderson, art.cit., 144.

(57) 文学的関心についても，Housman は詩作と研究とを切り離そうとし，Murray は逆に，文学的才能を翻訳などに生かそうとした（cf. Henderson, art.cit., 141-145; Lloyd-Jones〔2〕, 185-187, 192-194, 210-211）.

(58) 1908年 5月に オックスフォードを訪れた Wilamowitz は，'Greek Historical Writing' と題した講演を行ない，その中で，'We know that ghosts cannot speak until they have drunk blood; and the spirits which we evoke demand the blood of our hearts....' と語った. そして同年の秋に Regius Professor に就任した Murray は，翌年１月の記念講演

'The Interpretation of Ancient Literature' の中でこの Wilamowitz の言葉を引用し，たんに文献学的な専門的知識だけではなく，あらゆる人間的労力を降り注いで古典を生き返らせることが現代の古典研究者の務めであることを強調した（cf. Henderson, art.cit., 147-148; Wilson, op.cit., 128-129, 147-150）.

(59) Wilson, op.cit., 148.

(60) Lloyd-Jones〔2〕, 23.

(61) 'Humanism and Technique in Greek Studies' (1936): cf. Lloyd-Jones〔2〕, 23, 290.

(62) E.R.Dodds, Missing Persons. An Autobiography, Oxford 1977.

(63) Cf. Lloyd-Jones〔2〕, 23-25, 287-294.

(64) 'Greek Studies in Modern Oxford' (1961): in Lloyd-Jones〔2〕, 13-31.

(65) これまで私は主にギリシア学者たちを中心に述べてきた．たしかにオックスフォードではラテン語の学者はギリシア学者の活躍に比べると目立たない．だが次章でもふれるように，それはラテン語の研究や教育の規模がギリシア語のそれよりも小さいからではない．アシュモレアン図書館のギリシア語のパピルス研究に対して，ボドレアン図書館を中心にしたラテン古文書学・文献学の伝統も相変わらず根強い．とくに最近では，Roger Mynors が，ラテン作家の「死霊」を人血でよみがえらせようと努力した人だ．Corpus Christi のラテン語の教授を務めた（1953-1970），現在 86才のこの老大家の消息は詳しくつかめないが，『ゲオルギカ』のコメンタリーの広告と，弟子や友人が献呈した 'Texts and Transmission. A Survey of the Latin Classics' (ed. by L.D.Reynolds, Oxford 1983)から，なお健在の様子がうかがわれる．なお 'Texts and Transmission' については，『西洋古典学研究』XXXⅦの片山英男氏の書評を参照されたい．

(66) この章で用いた主な資料は以下の通り．

University of Oxford: Undergraduate Prospectus 1989-90.

University of Oxford: Graduate Studies Prospectus 1988-89.

Classics at Oxford (undergraduate courses).

Classics at Oxford (graduate studies).

The Oxford University Students' Alternative Prospectus 1989.

Classics Departments in British Universities, 5th ed., 1985, published by The Classical Association & the Council of University Classical Departments.

(67) Classics at Oxford (undergr. courses), 11-12.

(68) Cf. Gow, A.E.Housman, 6-8.

(69) ＩＣＵの川島重成氏の情報提供に感謝したい.